

第十輯紀念號の發刊に際して

學長 向 坊 長 英

歲月流るるが如しとか光陰箭の如しとかよくいつたもので、短期大學が我が國に初めて設置されたのは昭和二十五年の春であり、本學が紀要第一輯を同二十七年に發刊したのも遂昨日のことのように思つてゐるが、早くも第十輯を發刊する運びとなつた。欣快の至りである。

その間本學の或る教授の如きは文學博士の學位をとり、紀要には第一輯より第十輯に至るまで凡てにその研究成果の一端を發表して同僚を刺戟し、學界に裨益貢獻するところが多々あつた。筆者は賛成してゐる譯でもないが、萬一大學に勤務評定がありとすれば、こうした教授の勤務評定は歩がよいことであらう。思うに或る物は學問の性質上紀要に發表することが困難であり、又或る者は立派な教授であり、研究家であつても、紙上に發表することが不得手である。紀要に成果の發表がないからといつてその人の勤務評定を左右すべきでは勿論なからうが、未發表の方や發表數の少い方も出来るだけ發表して編輯委員の勞苦を軽減して

頂きたい。

大學にもあれ短期大學にもあれ、總じて大學の教授たらんとする者は、或る人がいつたように“Everything in something, and something in everything”に通曉している者でなくてはならない。學に志す者の生くる道は實に嚴しい生活である。常に己が力の乏しさ貧しさを自覺して悔いの心をもつて謙遜に不斷の努力と精進を勵む者でなくてはならない。力の乏しさは怖い、それ以上に力の乏しさを自覺しないことの方が更に一層危険である。教授たる者は専門の分野に於て立派な教育を施すと共に、その分野に於て不斷に研鑽の責務が存する。自問自答して自ら恥入り、驕馬に鞭打つ次第である。

本學は短期大學として出發して以來、今日まで順調に伸展して來たと自負し感謝している。紀要第二十輯發刊の曉に於て、本學は果して如何なる發展を遂げ形體を備えているであらうか。責任ある者は瞳を遠く高く深く見開いて時代を洞察し時代に先驅けして善處しなくてはならない。本學に關連ある者の更に一段の努力と和合を願うと共に、周圍の方々の協力と支援を頂いて、宿願の達成を切望して止まない。